

ICT を活用した教育プレゼンテーション能力の育成

－「教育の方法と技術」「教科の指導法」「アクティブ・ラーニング」－
A study on Educational Presentation with ICT in Teaching Course

下 野 正 代
Masayo Shimono

要 旨

教職科目である「教育の方法と技術」の授業において、ICT を活用した Power Point を作成し、模擬授業を行うという授業実践をした。各単元に入るときに、導入部は教科の指導において非常に重要な位置を占める。取得予定の教員免許ごとに、4 人までのグループを作り、出来上がった作品は、学内 web で担当教員（筆者）宛に送信し、Power Point のスライドショーを使って、模擬授業を行い、相互に評価を行った。

実践の成果としては、今後の教員の資質として求められる ICT を活用した授業を体験できたことと、アクティブ・ラーニングの視点からも意義のある授業実践となった。また、今後の教職課程のカリキュラムに求められる、「教職に関する科目」と「教科の指導法」の大きくくり化と統合の意義を証明するものである。

1 はじめに

一般的に、教員は自分自身が生徒だったときに教えられた指導法で、教育をしがちであると言われている。そういった繰り返しの中で、日本の学校現場における指導法の多くは、旧態然とした講義的、受動的、教師主導の指示待ち型の指導法のままである。文部科学省が、現在進めている教育改革において、求めているアクティブ・ラーニングの実践に、移行できない要因のひとつであると考ええる。

本論においては、2012 年度から 2014 年度の 3 年間に、筆者が担当した「教職に関する科目」の「教育の方法と技術」と「教科の指導」を合わせた、いわゆる「大きくくり化」「統合化」をした授業の実践の成果を、アクティブ・ラーニングの視点から検証したものである。

2 授業実践 教職科目「教育の方法と技術」

(1)「教育の方法と技術」のシラバス

①講義目的／講義内容

「教職課程履修者にとって必修の課目である。

教育の目的を達成するためには、生徒に対し教育内容を如何に効果的に指導するかという教育の方法と技術が必要で、重視されるところである。

本講義では、教育方法論の普遍的な考え方を基に、授業実践において必要な教材や教具の研究・選択、コミュニケーション、授業の展開、授業の研究・分析、生徒への教育的成果を計る評価などについて取り上げる。講義の後半では最新の科学技術を導入して進める授業のあり方について論及する。」

②到達目標

- ・教育の方法に関する歴史、基礎的な方法・技術を理解する。
- ・授業の指導計画や学習指導案（作成含む）について修得する。
- ・視聴覚教育やコンピューターに代表される最新の教育メディアについて理解し、基礎的な利用方法を修得する。

③授業計画

1. 「教育方法論」の概要
2. 教育方法の歴史（1） ～18 世紀
3. 教育方法の歴史（2） 19 世紀～
4. 学習指導の原理
5. 学習指導の形態
6. 授業のデザイン
7. 学習指導計画
8. 学習指導案
9. 授業分析
10. 学習指導の評価
11. 情報機器及び教材の活用(1)視聴覚機器
12. 情報機器及び教材の活用(2)教育工学①
13. 情報機器及び教材の活用(3)教育工学②
14. 情報機器及び教材の活用(4)コンピューター・インターネット
15. まとめ

授業は、オムニバス形式で二人の教員が担当し、筆者は第 11 回から第 14 回までの「情報機器及び教材の活用」を担当した。

④授業の課題

授業の課題は、「授業の導入部 10 分間を ICT を活用して Power Point を作成し、模擬授業を行う」である。導入部を作成する理由は、Power Point で視覚情報を与えながらの導入は、生徒たちに興味関心をもたせ、学習意欲を高める非常に有意義な授業法となるからである。

導入を工夫することは、教員が教えようとしている単元に、生徒たちの関心をひきつけ、どのような内容を学ぼうとしているのか、これからの授業がどのように展開をしていくのかとい

う期待感を持たせ、内的動機づけを行うことができるからである。

視覚優位の **Power Point** による教材の提示によって、授業が更に魅力的なものへとつながっていき、生徒の知識等が最も新鮮な時に生徒の心をつかみ、授業に集中させ、教師も軌道に乗って授業を進めやすくなるからである。筆者も、**Power Point** のない時代ではあったが、高等学校での英語授業で、新しい **Lesson** に入るときには、黒板いっぱいを使って、その **Lesson** に関係のある絵や図を描くことで、**Lesson** の内容を要約し、生徒に興味関心を持たせ、積極的に長文を理解する動機づけを行ってきた。

(2)授業の流れ（第 11 回～第 14 回）

①第 11 回目の授業内容（資料①）

- ・ **Power Point** を利用した効果的な授業の説明
- ・ 学生が感じている授業時の **Power Point** への不満
- ・ 視覚化の効果
- ・ 5 感の印象度
- ・ 表現方法別 記憶の保持率
- ・ 板書と **Power Point** の比較
- ・ 今後の授業の流れ
- ・ 本時の作業
- ・ 過年度の優秀作品紹介

この授業時間内に、グループの編成と **Power Point** を作成する単元を決定した。各グループが、指定された書式にグループのメンバーや内容を記入して、提出をした。ちなみに、2012 年度受講生の場合、グループのメンバーの人数は、1 人が 5 組、2 人が 3 組、3 人が 6 組、4 人が 5 組であった。教科・科目としては、高校「地理歴史」の「日本史」が 5 組、「地理」が 1 組、「公民」が 1 組、高校「商業」の「簿記」が 3 組、「原価計算」が 4 組、「マーケティング」が 1 組、高校「情報」が 4 組であった。

②第 12 回目の授業内容（資料②）

グループ毎に分かれて **Power Point** を作成した。机間巡視をしながら、質問に答えた。本時に指導した内容は、コピーをしないこと、見やすい文字の大きさ、体言止めをすること、色の使い方等であった。

③第 13 回目の授業内容

作成した作品を、学内メールを利用して、筆者宛てに送信し、届いているかどうかを確認した。添付ファイルの仕方や、ビジネスマナーとしての送信文の書き方の指導をした。入学以来、初めて学内メールを使用する学生もいて、よい経験となった。

④第 14 回目の授業内容

グループ毎に、作成した **Power Point** による授業の導入部を使って、模擬授業を行った。パソコンの操作も含め、各グループで協働して行った。生徒役の学生たちが、評価基準に従っ

て、各グループの発表を評価した。評価の項目は、時間配分（10 分間）1 点、Power Point の工夫 3 点、プレゼンテーション（声の大きさ、聞き取りやすさ、表情等）で 3 点、単元の導入部としての興味・関心が持てたかがで 3 点で、計 10 点で評価した。この結果を授業の評価に加味した。

発表時に気をつけることとして、生徒の表情を見て、反応を確かめながら進めること、大きな声ではきはきと自信をもって話すこと、資料を見ないで説明ができるように授業内容を自分のものとしておくこと等を指導した。

＜発表作品＞（資料③）「現代社会 （国会・内閣・裁判）」

＜発表作品＞（資料④）「商業 （経済とは）」

(3)受講生の感想

①Power Point について

・Power Point を使うだけでここまで興味関心を引き出せるとは思わなかった。自分たちが分かりにくいと感じるのであれば生徒はもっと分かりにくいと思うので、分かりやすい授業ができるように、先生になったら工夫をしていきたい。

・みんなの Power Point は、アニメーションを入れたり、クイズを出したり、とても工夫されていた。僕らの説明はとても短かったのもっと長く説明をして聞いている人を惹きつけるような説明を次回からはやりたい。プレゼンテーションの仕方でももっとゆっくりとしゃべる必要があったなあと思った。

②プレゼンテーションについて

・いろいろな人の発表を見て、プレゼンテーションなどが上手な人などがいて、もっと上手に自分たちも作れるようにしたいと思った。私は、パソコンを動かしていたので読んで発表はしていないけれど、ほとんどの人が紙を見て読んでいただけだったので、私が発表する立場になったときには、自分の言葉にして紙を見ないで言えるようにしたいと思った。

・10 分は長いと感じた。Power Point の工夫やプレゼンテーションの方法など、素晴らしいグループが何組かあって勉強になった。

・プレゼンテーションをやってみてスライドのタイミングと読むタイミングを合わせるのは難しいと思った。もっと聞き手（生徒）の方を見て、ずっと話をできるようにして、教師になるときには、もっと分かりやすくなるようなプレゼンテーションをできるようにしたい。また、他のグループがやったクイズ形式のやり方はとても印象に残り、教師になったら役に立つ技法として参考にしようと思う。

③協働学習について

・みんな色々なことについて調べていて、分かりやすく丁寧に発表していたと思う。自分たちのグループもしっかりできたと思う。これからは、今日よりさらにいいものができるよう頑張りたいと思う。

④指導法について

- ・導入の10分間だけでも大変なのに、50分間とか本当に難しそうだった。クイズ形式とかだと興味が出るのでいい方法だった。
- ・ずっと紙を見て話していたので、もっと皆の方を見て明るい声で話せるといいなと思った。よかったグループとくらべると図とか少なかったし、話している時間も少なかったなので、話すペースとか詳しい説明ができるようになるといいかなと思った。
- ・他のグループの発表を聞いて、いろいろなスライドの見せ方や、相手への話し方や語り方について新しい発見をすることができてよかった。
- ・家だと10分ちょうどだったのが本番だと聞いている人を気にしながら行うので、生徒が参加するような授業を行うには、余裕を持てるくらい時間をとった方が良いと分かった。これからは、時間配分に気をつけたいと思った。

⑤体験型授業について

- ・こういう機会をもらっていい経験ができてとても良かった。
- ・自分の中では、あまり満足のいく発表ではなかったが、みんなの知っているSNSなどについて説明できたので、僕の中では満足できた。教師って難しい。皆が楽しんで勉強してもらるように考えないとダメだし、人前で話すことはやはり緊張する。来年に向けて、今、自分ができることは、知識をもつこと、人前で上手く話すことだと思った。
- ・実際に自分たちが前に立つと思ったように話すことができないと感じた。自分は前に立って発表することはなかったが、文を作成するときに作業をした。他の人にも理解できるように説明になっていたように思えて少しほっとした。それと他のチームの「幕末の始まり～幕末崩壊まで」の発表は分かり易くて更におもしろかったので、こんな授業ができるようになっていきたいと思った。こういう機会をもらっていい経験ができてとてもよかった。

以上の受講生たちの感想から、実際に授業を行うことの大変さとやりがい、他のグループの発表から指導法を学べたこと、グループ内で協働ができたことの充実感を読み取ることができた。大学4年時の教育実習や卒業後の教壇に立つときの心構えができ、日々学び続けること、模擬授業を積み重ねていくことの大切さが実感できていた。

3 考察

(1)ICT活用の視点から

教育実習時の実習先への訪問指導で、教生の「研究授業」を見学することがある。慣れない板書を丁寧にしようとして時間がかかったり、生徒に背を向けて一途に板書をしていたり、板書するたびに一字一句を準備したノートを見ながら書いていることがある。また、板書にかかる時間を節約するために、中学「社会」の地図や商業「簿記」の貸借対照表を事前に模造紙に作成して、マグネットで掲示するなどの教材準備をする学生もいるが、黒板の大部分を占めてしまっていたり、模造紙の重さで教材がずり落ちてしまったりということもある。

Power Point を使うことで、授業時間を節約することができ、アニメーションを使用することで、ポイントを押さえたり、ズームインによって演習の幅を広げたりすることで、生徒たちの考える力や、自発的に授業に参加する態度を導き出すことができる。本時のまとめや前時の復習も、Power Point のスライドを遡ることによって、その都度、板書をする必要がなく便利である。何よりも板書になれていない教生や経験の少ない教員が起こしやすい文字の間違いを防ぎ、時間の節約ができる。

「教育の方法と技術」の第 12 回目の授業で指導したように、体言止めの Power Point を作成するには、教師自身が授業の内容を把握していなくてはならない。Power Point の内容を深め、生徒の興味関心をひく授業ができるかどうかは、教師自身の授業準備にかかってくる。ICT を活用した授業を行うには、教師自身がより深い学びをしなければならないのである。

(2)アクティブ・ラーニングの視点から

この活動を通して、学生たちが主体的に協働的に学修することができたかは、授業内での各グループでの活発な活動から推察することができた。各グループのメンバー全員が参加をした協働的な活動であった。発表をしようとする学習内容に詳しい学生、パソコンの操作に詳しい学生、プレゼンの得意な学生というように、それぞれが協働して、ひとつの作品を作り上げることができた。当然のこととして、責任感から 5 限目（16 時 40 分～18 時 5 分）の授業にもかかわらず出席もよく、作品の提出も期限を守ることができた。情報教育研究センターのオープン教室や教職課程センター室、仲間の下宿のパソコンを使って、熱心に主体的に準備をすることができた。

また、上記の学生たちの感想に見られるように、他のグループの発表を評価することで、これからの自分たちの学修課題に気づくこともできた。自ら考え学び、他者に伝えていく難しさと喜びを体験し、生涯学び続ける姿勢を身につける機会にもなった。従来の授業のように、板書を写し、ノートを持ち込んで考査で解答するという受動的な学修から、教師の指示で動くのではなく、自ら考え、主体的に学び、自分の意見を発表することができた。

実際に、筆者が Power Point を使って授業を行い、スクリーンに投影するものと、学生に配布する資料の 2 種類をつくることで、押さえておきたいポイントは書かせたり、色覚障害や発達障害の児童生徒への合理的配慮やユニバーサルデザインとして、キーワードに黒字でアンダーラインを入れることを学ぶ機会ともなった。

(3)大きくくり化と統合化の視点から

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(平成 27 年 12 月 21 日)において、教員養成に関する改革の具体的方向性が提言された。この提言を踏まえ、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則の改正が、平成 28 年 4 月になされた。

上記答申「4. 改革の具体的方向性」の(3)教員養成に関する改革の具体的な方向性」①教職課程における科目の大きくくり化及び教科と教職の統合において、次のように述べられている。

「大学の創意工夫により質の高い教職課程を編成することができるようにするため、教職課程において修得することが必要とされている科目の大きくくり化を行う必要がある。特に「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の中の「教科の指導法」については、学校種ごとの教職課程の特性をふまつつも、大学によっては、例えば、両者を統合する科目や教科の内容及び構成に関する科目を設定するなど意欲的な取組が実施可能となるようにしていくことが重要であり、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」等の科目区分を撤廃することが望ましい」と述べている。

教職課程（中学校一種）について見てみると、現行は「教科に関する科目」20単位、「教職に関する科目」の中の「教育課程及び指導法に関する科目」の中に、「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」と「各教科の指導法」が入っている。見直しのイメージでは、「教科及び教科の指導法に関する科目」の中に、「イ 教科に関する専門的事項」と「ロ 各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）（一定の単位数以上を修得すること）」とし28単位となっている。

また、見直しのイメージでは、「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」として、「ニ 教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」となっている。つまり、見直しにおいては、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」、「教科又は教職に関する科目」の3区分が廃止された。また、「教科及び教科の指導法に関する科目」、「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談に関する科目」においては、アクティブ・ラーニングの視点等を取り入れることとしている。

以上の改革の方向性から、「教育の方法と技術」における授業実践は、先駆的な実践であったと言える。

(4)教員に求められる資質能力の視点から

社会環境の急速な変化や学校を取り巻く環境の変化により、従来とは異なった教員の資質能力が求められている。本務教員であれ、講師であれ、採用と同時に教壇に立ち、責任をもって生徒に教えていかなければならない。

現在、学校現場は、ベテラン教員の多くが定年退職し、新規採用が大幅に進んでいて、年齢や経験年数の不均衡が起き、教員の構成が空洞化してきている。いじめ、不登校、校内暴力、貧困、児童虐待等、学校の教育課題は多様化し複雑化してきている。児童生徒への対応はもちろんのこと、保護者対応にも多くの時間とエネルギーを費やさなければならないのが現状である。

こうした状況の中で、教育課程や授業方法の改革の視点からの授業改善と、教科等を越えたカリキュラム・マネジメントへの対応も求められている。英語、道徳、ICT、特別支援教育等、新たな課題への対応と、外部性・専門性を有するスクール・カウンセラーやスクールソーシャルワーカー、場合によってはスクールポリスとチームを組んでの児童生徒への指導・支援をするという「チーム学校」も本格的に始まってきている。

以上のような課題に向かい合っていける教員を養成することが、大学の教職課程に求められており、在学中にどのような力を育成していくのが教職課程での大きな課題である。多忙で時間確保が困難な現場で授業準備をしていくためには、在学中に生涯学び続けていくという力と、教員になるための最低限必要な基礎的・基盤的な学修をするという認識が必要である。そういった意味で、「教育の方法と技術」において「教科指導」の模擬授業を行ったことは、教員を目指す学生たちには貴重な経験となった。

4 おわりに

本稿では、ICT の活用ができる学生の育成についてまとめ始めたが、書き進めるうちに、これからの教員養成という大きな課題に向かい合うこととなった。また、答申にある「教職に関する科目」と「教科に関する科目」を統合するという科目区分の大きくくり化を、答申以前に実践していたことに気付くことができた。ICT を活用した授業の導入部をグループで作成するという課題により、学生たちが主体的に協働し、自ら学ぶ姿勢を養うことができたのは、この授業実践そのものがアクティブ・ラーニングであったからである。

「教育の方法と技術」で模擬授業を経験した学生たちの多くが、出身地の教育現場で活躍しているのは嬉しいことである。これからも、教職課程を履修している学生たちが、「教員になるという夢」をあきらめることなく、学び続けていけるような授業を行っていききたい。

<参考文献等>

- ・「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令等の公布について（通知）」 26 文科初第 630 号、平成 26 年 9 月 26 日
- ・「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令等の公布及び施行について（通知）」 25 文科初第 592 号、平成 25 年 8 月 8 日
- ・「教育職員免許法施行規則（昭和二十九年十月二十七日文部省令第二十六号） 最終改正：平成二八年四月一日文部科学省令第二三三号」
- ・教育課程研究会編著 「アクティブ・ラーニングを考える」 東洋館出版、2016
- ・小林昭文監修 「図解 アクティブ・ラーニングがよくわかる本」 講談社、2016
- ・河合塾編 小林昭文・成田秀夫著 「今日から始めるアクティブ・ラーニング」 学事出版、2015
- ・枚田 香 著 「PowerPoint プレゼンの極意」 アスキーメディアワークス、2011
- ・坂元 昂 編著 「教育の方法と技術」 ぎょうせい、1990
- ・山口 満・唐澤 勇 監修 「実践に活かす教育課程論・教育方法論」 学事出版、2006
- ・谷田貝公昭・林 邦雄・成田國英 編 「教育方法論」 一藝社、2004
- ・渡部 淳＋獲得型教育研究会 編 「教育プレゼンテーション」 旬報社、2015

下野 正代（保健医療学部看護学科教授）

<資料①>第11回「教育の方法と技術」の教材 Power Point

ICTを活用した教育の方法と技術

教育の方法と技術#11
 201×年×月×日(火)第2限

Power Pointを利用した効果的授業

- ・ 主役は話し手(教師)ではなく、聞き手(学生)である
- ・ 聞き手(学生)と話し手(教師)の要望が一致して、両者が満足する結果が得られたとき、プレゼンテーション(授業)が成功したと言える


Power Pointを利用した授業評価

- ①見やすいように照明に配慮してほしい
- ②ページを増やしても大きな活字にしてほしい
- ③大切な所は文字に色をつけてほしい
- ④書き写す時間を設けてほしい
- ⑤書いているときに話さないでほしい
- ⑥Power Pintの内容に添った資料がほしい
<朝日大学歯科衛生士専門学校「心理学」で受講生による授業評価>

視覚化の効果

- ・ 外から受ける情報のうち、視覚からの情報が五感の中で最も印象に残りやすい
- ・ 五感の印象度
 視覚 83% 嗅覚 3.5%
 味覚 1.5% 触覚 1% 聴覚 11%

視覚+言葉=印象の強化

| 左 脳 | 右 脳 |  |
|-----------------|-----------------|---|
| 筋道を立てて、部分を詳しく理解 | 視覚的に、全体をイメージで理解 | |
| 話し手の言葉で理解 | 図解やグラフで理解 | |

黒板よりPower Point

歯科衛生士専門学校生(83名)の感想

- ①黒板より見やすい 64%
- ②図や写真があって理解しやすい 28%
- ③ノートが取りやすい 27%
- ④時間の節約・授業の効率化 23%
- ⑤授業のポイントがよく分かる 23%
- ⑥画面上の操作が役に立つ 7%

表現方法別 記憶の保持率

| | 口頭表現 | 映像表現 | 口頭表現+映像表現 |
|------|--------------|------------|-------------------|
| 表現方法 | 言葉の説明で伝達した場合 | 映像だけで見せた場合 | 映像を見せながら言葉で説明した場合 |
| 3時間後 | 70% | 72% | <u>85%</u> |
| 3日後 | 10% | 20% | <u>65%</u> |

POWER POINT作成

授業の各章の導入部10分間のPOWER POINTを協働して作成

- ・ チーム結成: 取得免許科目毎に3~4人
- ・ チーム名と責任者を決める
- ・ 科目名を決める 例「高等学校 日本史」
- ・ 作成する単元を決める 例「戦国時代」
- ・ 教科書の該当する部分をコピーする
- ・ 5号館 3階 「教職課程センター室」でコピー

- 9 -

評 価

- 下野担当の 4 時間分で 30 点
- 12 月 13 日 (金) 5 時までに、E メールに作品を添付して提出のこと
shi × × × ×@alice.asahi-u.ac.jp
- スライドは 10 枚ぐらいとする
- 各スライドに、ノートもつけて提出
- Power Point の作品をメールに添付して提出、プレゼンで評価

<資料②> 第 12 回「教育の方法と技術」の教材 Power Point

Power Point の作り方 一分かりやすさと見やすさー

「教育の方法と技術」#12
201 × 年 × 月 × 日 (木) 第 × 版

体言止めを目指すこと

- 教科書やネットからそのまま引用した文章は NG
- 生徒が瞬時に読めて、理解しやすいこと
- 文字数が多くならないように工夫
- 体言止め:「名詞で終わらせる」
例「源頼朝が 1185 年に鎌倉幕府を開きました。」
→ 1185 年 源頼朝によって鎌倉幕府成立
- 1 行の文字数 = 5 ~ 7 が記憶に残る

記憶の種類

| | |
|------|---|
| 感覚記憶 | 感覚器官でとらえた外部刺激 約 1 秒で消える記憶 |
| 短期記憶 | 約 30 秒で消える記憶 マジカルナンバーオブセブン (1 チャンク = 7 ± 2 = 5 ~ 9) |
| 長期記憶 | 手続き記憶 宣言的記憶 意味記憶 |

改行を入れてスッキリと

- 長すぎる文章は疲れるので NG
- 改行をすると読みやすい
- 長い文は、いくつかに分ける
- しているとのことですが、→ している。
- 2 つがあるようで → 2 つがある。
- 考えたので → 考えた。
- 「、」 → 「○」

記憶の種類

| | |
|------|---|
| 感覚記憶 | 感覚器官でとらえた外部刺激 約 1 秒で消える記憶 |
| 短期記憶 | 約 30 秒で消える記憶 マジカルナンバーオブセブン (1 チャンク = 7 ± 2 = 5 ~ 9) |
| 長期記憶 | 手続き記憶 宣言的記憶 意味記憶 |

改行を入れてスッキリと

- 長すぎる文章は疲れるので NG
- 改行をすると読みやすい
- 長い文は、いくつかに分ける
- しているとのことですが、→ している。
- 2 つがあるようで → 2 つがある。
- 考えたので → 考えた。
- 「、」 → 「○」

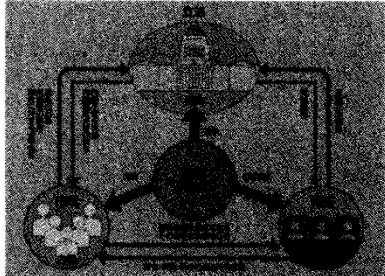
<資料③>作品「現代社会 (国会・内閣・裁判)」

現代社会

国会・内閣・裁判

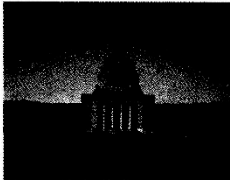
〇〇 〇〇

三権分立と国会



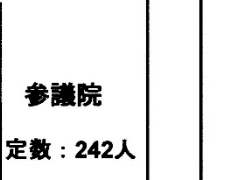
国会

衆議院



定数：480人

参議院

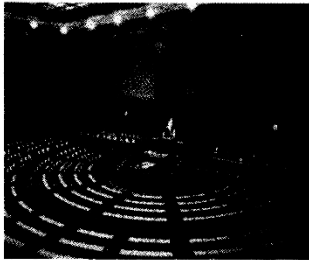


定数：242人

国会議員になると...

- ・不逮捕特権
国会の会期中は逮捕されない。
- ・免責特権
- ・歳費特権
両議院の議員は、国庫から相当額の歳費を受ける。

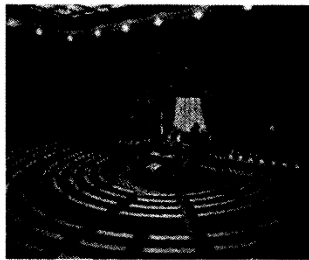
衆議院本会議場



座順のしきたり

- ・院内会派ごとに座る。
- ・議長席の位置から見て右端から多数の会派が座席を占め、一番左端が無所属議員となる。
- ・最前列に一年生議員、後ろにいくほど大物の長老議員となる。

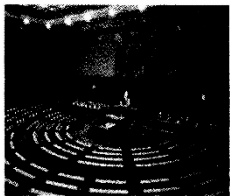
参議院本会議場



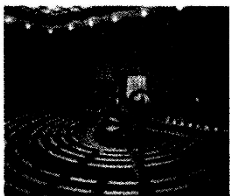
座順のしきたり

- ・院内会派ごとに座る。
- ・中央に多数の会派が座席を取り、その左右に、その他の会派。
- ・最前列は一年生議員。

衆議院



参議院



参議院の議場には、議長席の後方に、国会の開会式の時に天皇が座る席がある。

国会中継の「華」 予算委員会



「何を質問しても良い委員会」

国会議員はテレビ局に重宝される

・意外に視聴率が取れる。

・ギャラが安い。

1人1回、1万円～5万円程度(相場は3万円)。

よくテレビに出ている議員は、1年間に200万円から、多い人は5,600万円も稼ぐ。



<資料④>作品「商業 (経済とは)」

経済とは？

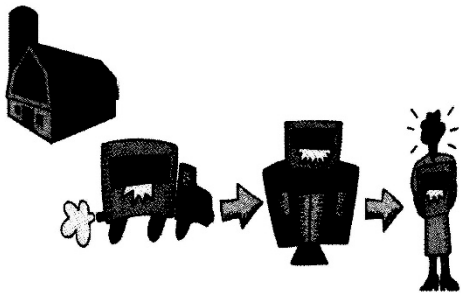
・買い物すること？

・物を作ること？

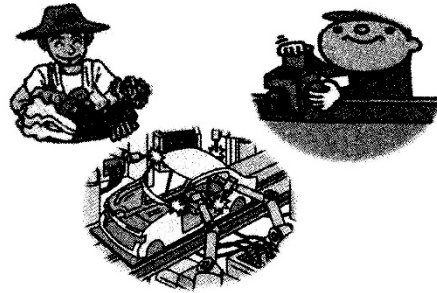
・物を運ぶこと？

・お店はどのように商品を仕入れ、売っているのでしょうか？

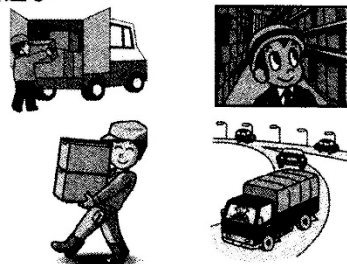
生産⇒ 流通⇒ 消費



ものが作られる



物を運ぶ



物を買う



経済

•私たちが、消費する財貨やサービスは社会的分業の進んだ今日では、農業・水産業・工業・サービス業などに従事する生産者によって商品として生産される。

•生産された商品は流通業者の働きによって、私たち消費者のもとに届けられる。

•その商品を消費者が必要なものを必要なだけ買う。

•このように今日の社会では、人々の生活は生産・流通・消費という3つの活動によって成り立っているこの3つの活動のつながりや、一つの活動を経済という。